

学生が参画する子育て支援センター設立のため、

「岡崎げんき館」における実践的な取り組み

古川 洋子

愛知学泉大学

The practical approach at “OKAZAKI-Genki KAN” by the university students, for establishing of the child raise support center.

Yoko Furukawa

キーワード:子育て支援 Child raise support,

養成校 School of nursery teacher training,

専門性 Expertise,保育 Nursery

1 はじめに

2017年改定された「保育所保育指針」では、保護者への支援が「子育て支援」と示された。子どもをとりまく環境が、少子化や核家族化、ひとり親家庭の増加などに伴い、大きく変化している。また、地域のつながりが希薄化し、家庭における子育ての負担や不安を感じている保護者が増加している。今回の改定で、ますます保育所の特性を生かし、保育の専門性を有する保育者による支援を提供することが求められている。

こどもの生活専攻の学生は、保育所実習、幼稚園実習、施設実習等の実習を通して、保育者の役割や子どもとの関わりを実際に学んでいる。しかし、学生の抱える就職後の不安の一要因として、保護者との関わり方が挙げられる。現状として、保護者の姿を理解し、子育て環境などについて、学生に学修させることは難しい問題である。そこで、本研究では岡崎げんき館でおこなわれている活動に、学生が主体的に参加することによって、学生の意識の変容を明らかにし、岡崎げんき館での経験の重要性を示唆することを目的とする。さらに、これからの保育者養成校における子育て支援活動の取り組みについて検討する。

2 子育ての現状

図1は、乳幼児の遊び相手をあらわしている。乳幼児の遊び相手は「母親」がもっとも多い。核家族化の状況の中で、子どもと一人で向き合う母親は、「孤育て」に奮闘しなければならない。母と子の密着度が高まり、「息がつまりそうな子育て環境」に繋がりやすい状況になっている。筆者が関わっていた、子育て支援サークルに参加していた母親からの話である。

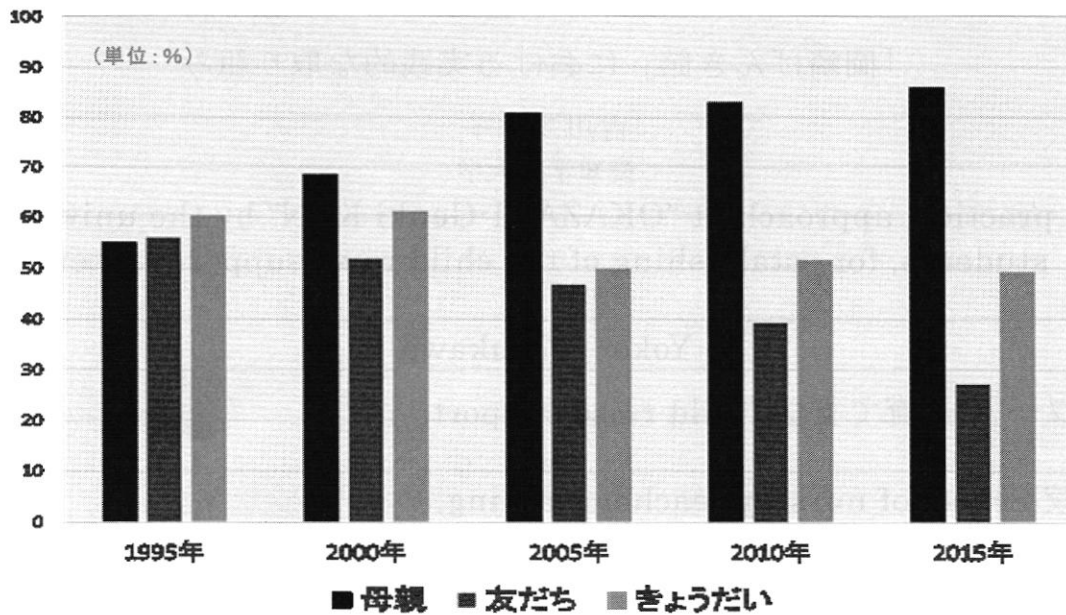


図1 平日、幼稚園・保育園以外で一緒に遊ぶ相手
 出典 ベネッセ教育総合研究所「幼児の生活アンケート 2015年」¹⁾より作成

- ・ 育児について教えてくれる人がそばにいない。ネットからの情報にたよっているが、情報が正しいのか、間違っているのか、判断することができなくて、より一層、悩む。
- ・ 自分の子育てが、育児書や雑誌通りにうまくいかず不安になる。
- ・ 子育ての価値観を周囲から押し付けられることがあり、ストレスをととても感じる。
- ・ 子育てのために、自分のやりたいことができない。社会から、取り残されてしまうのではないかという不安がある。働きながら子育てをうまくやっている人が、うらやましいと思うことが多い。

このような、保護者の多様な子育ての悩みを理解し、対応するスキルを身につけることも、保育者には求められている。1994年頃から、「子育て支援」という言葉が一般的になった。それまでに、保育所や幼稚園で、子育て支援をしていなかったわけではない。また、子育てを支援するという行為は昔からあるものだ。例えば、困ったことがあれば、お隣の家の人が助けてくれたり、近所のお年寄りの知恵が役に立ったり、悪いことをすれば注意してくれる人が身近にいたりした。子育て支援は、新しくできたものではなく、昔からあった大事な要素を、新たなかたちでよみがえらせたことではないだろうか。

現在、様々な子育て支援が展開されている。少子化の進行や核家族の増加に加え、共働き家庭の増加、離婚などにより家族形態が多様化している。また、子育てに対し孤立感や負担感を感じる保護者が増えている。こうした子育て家庭を支援するため、「子育て中の居場所づくり」として、地域で子育て支援が盛んにおこなわれるようになった。学生が活動を行っている岡崎げんき館「子ども育成ゾーン」は、気軽に施設の方に子育ての相談ができ、親子で過ごす身近な居場所となっている。